

## ツイメルマンのリサイタル

ピアノストのツイメルマンはスイス在住だが、じつくりとリサイタルを聴ける機会には意外と少ない。6月18日、ルツェルン交響楽団の年間プログラムに組み込まれた彼のリサイタルには、長年のファンたちが詰め掛け、彼のピアノを堪能していた。

ブラームス「ピアノ・ソナタ第3番」を、椅子に座った勢いで弾き出すと、多少響き過ぎるKKL（ルツェルン・カルチャリー・コングレスセンター）の中で、彼のピアノからオーケストラの音が聴こえて来たような気がした。その響きをさらに膨らませて第1楽章が終わると、ブラームスがオットー・インカーマンの詩「若き恋」を添えた第2楽章では、一転してピアノとの対話に変わった。郷愁を漂わせ、残響として上に立ち昇って消えていくと、華麗な第3楽章を経て第4楽章となったが、ハプニング続きで集中できなかった。まずはバルコニー席の二人の婦人がゆっくり、邪魔しないように退席していくのに気をそらされ、次は平土間席から携帯電話が鳴った（！）しかしツイメルマンはピアノと手を取り合うように雑念を排除し、フィナーレでは素晴らしい高揚感を膨らませた。

休憩後はシヨパン「スケルツォ全曲」で、スリル満点のスピードで弾ききり、病弱だったシヨパンが健康体を望んで生まれ変わったのかと思えるほど、シヨパンの美意識が匂い立つ。「第3番」では悪魔的ですからあり、ノリ過ぎて弦が切れてしまった。調律師が呼ばれ、5分強の修理で「第4番」に移ったのだが、せっかくの全曲演奏のアーチが途切れてしまったのが残念だった。最後は花束を渡した主催者側の女性に、頬への

キスを求めたり、弦が切れるほど共に健闘したピアノにも拍手を求めるなど、ご機嫌な様子だったが、アンコールはなかった。

## ホモキとルイジの《ナブッコ》

毎シーズン1演目は協働するチューリヒ歌劇場のアンドレアス・ホモキ総裁とフリオ・ルイジ音楽監督だが、昨年の《運命の力》に続くヴェルディの選曲に期待が高まっていた。しかし《ナブッコ》の結果は、バビロニアのエルサレム征服劇ではなく、「ドイツ人が征服しようとして無駄骨に終わったイタリア（オペラ）」だった。

6月23日、初日の幕が開くと19世紀ヨーロッパの出で立ちのロイヤル・ファミリーと群集。突然妃が倒れ、娘二人と王が走り寄り、その後、王も強い頭痛に襲われ……など、目で追っている、序曲への集中を削られる。（「行け、わが想いよ、金色の翼に乗って」の旋律が無造作に奏でられたのは耳を疑ったが、それ以外は文句なしの演奏だった。回り舞台の真ん中に立った壁が波にも森にも見え、迫り来る効果が抜群だった以外は、このドイツ人演出家を賞賛できる部分はない。第1幕からそのまま第2幕に繋げたのも、歌手にとっては厳しい。ドイツ人バリトン、ミヒヤエル・フォツレはナブッコ初役だが、「ヴェルディ・レガート」、「息と共に歌うの

ではなく、息の上に声を乗せて歌う」という二つの「秘訣」が体得できていないため、無意味な苦勞を強いられ、最後まで歌い切れるのか心配した。（以前《ファルスタフ》のフォードを歌った時は問題なかったのだが）。もう一人のドイツ人、ゲオルク・ツエッペンフェルトも、ワグナーでは大劇場でも楽勝なのに、この中劇場でのザツカリアは陳腐に終わった。アビガイッレ役のアンナ・スミルノヴァは強靱な声は持っているものの、最近では珍しい絶叫タイプで、高音はキツイのに力で押し続ける。最



ドタバタ劇になってしまった？ チューリヒ歌劇場の《ナブッコ》から © Monika Rittershaus

後のアリアだけは弱音で綺麗に歌えたのは奇跡だ。唯一のイタリア人であるヴェロニカ・シメオーニに期待したが、小さな役の彼女にオペラの流れが変えられるわけもなく、ベルカント・オペラではクールにイタリアの伝統に則って歌う彼女も、つられて声を張り上げるせいか、いくつか音程の低い部分が目立った。ヴェルディが効果的に作曲した緻密なアンサンブルが醸し出すはずの「静」の緊迫感が、すべて表面的な感情表現に逃げ、「始終嘆いて」、「脅して」、「意味なく和解して」の、ドタバタ劇になっていた。唯一、イスマエーレ役のベンジャミン・ヘルンハイムは無理なく突き抜ける高音と、周りに流されない感情移入で今宵の救いとなった。合唱は大成功を収め、ルイジに対しても開演時には疎らだった拍手が、休憩後は喝采に代わっていた。

## トーンハレ管にナガノが客演

暫く前から街中にケント・ナガノの大きなポスターが貼られ、告知されていたチューリヒ・トーンハレ管交響楽団の演奏会を6月13日に聴いた。現在38歳のマティアス・ピンチャー作曲「5つのオーケストラ曲」は、同じくナガノ指揮で、1997年にザルツブルク音楽祭で世界初演されたので、今宵も明瞭な棒さばきで確信を持った演奏を聴かせた。続くラヴェル《シエラザード》は、パトリシア・ブテイポンをソリストに迎え、完全なフランス音楽の世界を構築していた。休憩後はアイヴズ「交響曲第4番」で、一変してアメリカの匂いを漂わせた。そんな大陸も時代も超えた演奏に、登場時はバラバラだった拍手が、大きくなってナガノらを包み込んだ。